旭ケ丘中央町内会

登下校の安全見守り続ける

旭丘小学校児童の安全を守り隊

隊員が着用している青緑色の冬用のブルゾン。背には「守り隊」の文字。春秋用や夏用もそろえている

元気なあいさつ響く朝

「おはようございます!」

12月初めの朝。学校へ向かう児童が、白い息と一緒に元気な声を上げます。その声に目を細め、「はい、おはようございます」とあいさつを返すのは、青緑色のブルゾンを着た大人たち。背には「旭丘小学校児童の安全を守り隊」の文字が見えます。仙台市青葉区の北部、旭ケ丘地区の毎日の風景です。

旭ケ丘地区は、昭和30年代に開発された住宅団地で、地下鉄南北線旭ケ丘駅を抱え、市民センターや科学館、文化ホールなどの施設が集まります。守り隊が所属する旭ケ丘中央町内会は、地下鉄駅を含む一帯を区域としており、会員世帯数は2,000を超えます。

継続のカギは組織化

守り隊は、町内会の役員を中心とする60代から80代、平均年齢78歳の42人で構成されています。平成13年に大阪で起きた児童殺傷事件など、児童が犠牲になる事件や事故が市内外で相次ぐ中、学校やPTAの防犯パトロール運動に呼応し、地域として一層充実した活動を展開しようと、平成16年7月に発足しました。

それまでも有志による活動はありましたが、機運が盛り上がっては、自然消滅するという繰り返しでした。このため、設立メンバーで実働隊長の三塚さんらは、「活動を継続させるには組織化が必要」と、当初から活動要領や会員名簿を整備。隊員の意識高揚や視覚的な防犯効果を狙い、腕章だけでなくブルゾンや帽子もそろえていきました。町内会の生活安全部に位置づけ、主な活動費は町内会の予算から支出しています。

活動を継続させるには組織化が必要

通学路の要所に立ち、児童の安全を見守る隊員たち。「おはようございます」のあいさつが響く

地域に学校がある限り、続けていかなければ

（左から）三塚実働隊長、中澤隊長（旭ヶ丘中央町内会長）、色川総括部長

できる人が、できるときに、できることを

「できる人が、できるときに、できることをする」も、継続のポイントの一つ。例えば、朝のごみ出しは児童の登校時間に、犬の散歩や買い物は下校時間に合わせるなど、日常の行動の中で無理なく見守り活動を行っています。「外に出るときに、そろいのブルゾンを着ていれば、大勢の人が活動しているように見えます。それが犯罪抑止につながります」と、三塚さんは説明します。

学校から授業時間表をもらい、行事等による登下校時間の変更にも対応。不審者情報や授業予定に急な変更があったときのために、学校を発信元とする連絡網もつくり、見守り時間に空白がないようにしています。登下校時間以外でも、外出の機会にはブルゾンを着るよう心掛けています。

隊員の自宅に掲げられている看板。緊急時に逃げ込む避難所の目印にもなっている

地域のねぎらい、活動の励み

活動は近隣の町内会や老人会にも広がり、平成18年には学区内の連絡協議会もできました。さらに防犯関係の全国大会で活動発表を依頼されたり、県内外からの視察やマスコミの取材を受けたりと、先進地としても注目されています。

青緑色のブルゾン姿はすっかり地域に定着し、まちを歩いていると地域の人から労いの言葉を掛けられます。クリスマスやバレンタインデーには、児童からメッセージ付きのプレゼントをもらうこともあり、活動の励みになっています。

確かな見守りのためには、一定の活動人員が必要です。発足以来どうにか隊員数は維持しているものの、高齢化も進んでおり、新たな隊員の確保が課題となっています。しかし、妙案はなかなか浮かびません。「地域に学校がある限り、続けていかなければ」。三塚さんはそう言うと、その言葉を心の中で反すうするようにうなずきました。目を細めたそのまなざしは、元気に登校する児童の姿を見つめているようでした。

隊員たちの胸に付けられている児童手作りのワッペン

（取材・執筆　青葉区まちづくり推進課）

吉成学区連合町内会

吉成学区のよしボラ隊!

吉成小学校の「てらこや」での学習指導

よしボラ隊発足

吉成学区連合町内会では、町内会とは別に国見ケ丘環境施設維持管理組合を組織しており、当初より独自の地域清掃活動を行うなど、環境美化活動に努めていますが、年々参加者が少なくなってきています。

そのような中、吉成中学校の校長先生の発案により、地域の町内会長に困っている事などのアンケートを実施し、高齢化が進む地域の現状を把握した後、 学校と町内会長の連絡会で生徒会役員がボランティア活動計画の説明を行い、全生徒による「よしボラ隊」が平成25年9月に発足しました。

発足式当日は、中学校の体育館に生徒・保護者・地域住民合わせて270名が集まり、生徒全員の幅広い活動として、地域のコミュニティづくりなど地域貢献に取り組んでいく決意表明がなされました。

地域行事に参加し顔の見える関係を構築

生徒たちは、早速、学区内の道路のごみ拾いや危険箇所の調査を行い、ボランティア活動の計画に着手。学区民運動会などの町内会活動にも参加しました。これにより、これまで交流のなかった高齢者と生徒が、お互い顔見知りになることができ、顔の見える関係の構築につながり、地域を元気にする活動が始まりました。

また、学校・家庭・地域が一体となった教育を推進しながら、地域の絆づくりにつなげる取り組みを支援する「仙台を元気にする地域の教育力アップ事業」にも選定されました。

「よしボラ隊」の平成25年度の主な活動は、吉成市民センターまつりや国見ケ丘三丁目町内会「餅つき大会」への参加、国見ケ丘五丁目町内会「防災訓練」のサポートです。また、冬期間には、歩道や階段の雪かきを町内会と一緒に実施しました。

平成26年度は、連合町内会主催の「国見ケ丘地区夏祭り」「吉成地区学区民運動会」、吉成小学校PTA主催の「てっぺん祭り」や国見ケ丘五丁目町内会による「豊齢の集い」に参加、吉成小学校の「てらこや」で学習指導を実施するなど、活動の幅も広がっています。

交流のなかった高齢者と中学生が顔見知りに!

吉成地区学区民運動会の準備作業

国見ケ丘地区夏祭りでのみこし担ぎ

地域の子どもは地域が育てる、地域で守る

地域で育む世代間交流

連合町内会では、町内会及び地域の行事を実施する際に、積極的に中学校への声掛けを行い、地域住民と生徒が協力する関係の構築を目指しています。

「よしボラ隊」の生徒にとっては、町内会や地域行事に参加していく事により、ボランティア意識の高まりと多様な視野や価値観を学ぶ機会となっていて、「地域活動に参加することが勉強になった」「地域の方々に喜んでもらえて、参加する励みになった」などの声が聞かれ、地域に溶け込んでいく意識がより強くなりました。

また、「よしボラ隊」は発足時からロゴマークを作成しており、生徒自身が考えたロゴマークは「地域全体が手を取り合い、活性化することへの願いをこめたマーク」とのことで、「よしボラ隊」が参加する行事などには、ロゴマークの入ったのぼりを持参し、「よしボラ隊」を周知するよう努めています。また、行事に参加した後には、生徒同士が必ずミーティングを開き、活動の点検や反省などを行い、取り組みをますます盛んにさせています。

よしボラ隊のロゴマーク

地域活動の未来へ

生徒のこうした活動は、高齢化が進む国見ケ丘団地において、地域活動への若い人たちの参加を促し、活気をもたらしています。

また、「よしボラ隊」の活動が、学校・保護者・地域住民の顔の見える関係の構築につながり、地域の子どもは地域で育てる、地域で守るといったコミュニティづくりを進めることができるようになっていきます。

「地域は学校の応援団となり、学校は地域の活力源になっています。今後ますます「よしボラ隊」との連携を深めてより良いまちづくりを目指したいと考えてます」と連合町内会長の熊谷さんは、笑顔で話してくれました。

連合町内会主催「芋煮会」の準備作業手伝い

（取材・執筆　宮城総合支所まちづくり推進課）

福住町町内会

町内一丸となって!
地域を支える女性たち!

福住婦人コスモス部

防災訓練等を通じた「つながり」づくり

福住町町内会は、昭和46年1月に設立した世帯数580世帯の町内会です。

町内会長は、防災への意識が高く、いつか起きるであろう震災に備えるため、13年も前から大がかりな防災・防火訓練を実施しており、他市町村の町内会との連携など新しい取り組みも行っています。

また、実効性のある防災組織づくりには、たくさんの町内の人に関わってもらうことが大切と考えた会長は、独自の体制づくりを進めました。

その結果、平成23年3月の東日本大震災では、普段からの防災訓練で培われた「つながり」が、町内の自助、共助に力を発揮しました。

町内会活動の特色は…

たくさんの人に町内会活動に関わってもらう仕組みとして、福住町町内会には二つの特徴があります。一つは、町内会では一般的に1名～3名程度ということが多い「副会長」を12名置いていることです。町内会では、総務部や事業部などの専門部を置いていますが、それらの代表者が町内会の副会長を兼務しています。それは、専門部がそれぞれ権限を持って活動しやすくするための工夫であり、また、役員会に出席することで町内会での活動の情報を共有するためです。

二つ目は、防災・防火の役割を「班長」が役員と同等に担っていることです。各班の班長は、町内会費の集金や市政だよりの配布に加え、防災・防火の訓練時にもそれぞれが役割を担うことで、町内での出来事に関心を持つようになり、班長の役を降りた後にも町内会活動に積極的に参加してくれるようになりました。

防災避難訓練の様子。要援護者の報告を受ける場で準備を行う

婦人コスモス部のお母さんたちが、防災訓練をテントの中から見守る

地域のお母さんたちの交流の場を作っています

婦人コスモス部のお母さんたちが要援護者の情報を受け付け。
中学生と一緒に呼びかけなども行った

婦人コスモス部が町内会活動を支えています

特に町内会活動を支えているのが、「婦人防火クラブ」から発展した「婦人コスモス部」です。防災訓練の際の要援護者安否確認の担当、そして敬老会のお手伝いなど、様々な事業に協力し、女性ならではの心配りが、地域の活動に欠かせないものとなっています。

婦人コスモス部は、普段から、いわゆる「婦人部」として、茶話会や旅行会などを企画し、地域のお母さんたちの交流の場を作っています。

部長の高木さんは、「これといった活動をしているのではなく、町内のお手伝いをしているだけ」と話しますが、これらの日頃からの交流により、地域の女性たちには強い絆が生まれ、「婦人コスモス部」は町内会の活動を積極的にバックアップすることができています。

お母さんたちも生徒たちと一緒になってバケツリレー。
息があっているかな?

地域のつながりを大切に

「50代、60代のお母さんたちを中心に、28名の部員がいきいきと活動しています」と話す高木さん。「婦人コスモス部」が、このような強いつながりを持ち、活発に活動しているのは何故でしょうか。

以前は、「婦人防火クラブ」が町内会で女性が集まる唯一の団体でしたが、平成13年頃に「婦人部」と「福祉部」が新たに設立され、地域の若い女性たちが一同に集まる機会が失われていました。その一方で、「婦人防火クラブ」の担い手が高齢化したり、中学校まで子ども会を通じて地域に関わっていたお母さんたちが卒業後に町内会とのつながりが薄れてしまう、という問題もありました。

そこで、「婦人防火クラブ」のメンバーが積極的に、お子さんに手がかからなくなったお母さんたちに勧誘を始め、クラブの若返りに成功しました。ところが、クラブの役員は1年間の任期で交代制という決まりがあり、長く活動に従事してもらうのが難しい状況にあったのです。

町内会長を交えてこのような状況を相談した結果、「婦人防火クラブ」は若いお母さんにも関わってもらいやすいよう1年間の交代制を継続しつつ、平成21年、「婦人部」を「婦人コスモス部」と名称を変更しました。「婦人防火クラブ」での役員経験者が中心となって、女性ならではの細やかな気遣いで、町内会の活動を下支えするなど、活動の幅も広がりました。

このように、「婦人コスモス部」は、地域の女性たちが試行錯誤の末、自分たちで作り上げた活動の場。だからこそ、部員の皆さんが同じ思いで、地域のために活動しています。

（取材・執筆　宮城野区まちづくり推進課）